

スポレートの町で声を聞く夢と聖フランシスコ
—信仰のまなざしで味わういくつかの気づき—
 《聖フランシスコの生涯をていねいに味わい人向け②》

(1) 聖フランシスコに語りかけた幻視

聖フランシスコは、戦場で手柄を立てて騎士になるため、イタリア南部のプッリャに向かおうとしていました。道中、武具で満たされた家または宮殿の夢を見ます。

『会のはじまりまたは創立』以降の伝記には、この夢の出来事の後、スポレートにおいて聖フランシスコに語りかける幻視が記されています。

その主な内容は、次のとおりです。夢の中で聖フランシスコは、「どこへ行こうとしているのか」と尋ねられたので、自分の計画について話します。すると、声は、「主人としもべのうち、どちらがお前により良いことを行えるのか」といった質問をします。聖フランシスコが「主人」と答えると、声は、なぜ主人を捨ててしもべを選ぶのか、と問いかけます。そこで聖フランシスコが、「主よ、わたしが何を行うようお望みですか」と問いかけると、声は、故郷に戻るよう促します。こうして聖フランシスコは、騎士になることを断念し、アッシジへ戻っていきます。

最初の伝記である、チェラーノのトマス『祝福されたフランシスコの生涯』（1229年）や、その後に記された『再発見された、祝福されたフランシスコの生涯』（1230年-1240年）、シュパイエルのコリアノ『聖フランシスコの生涯』（1232年-1235年）には、このスポレートの夢は記されていません。この三つの伝記では、武具で満たされた家または宮殿の夢を見て、騎士になれる預言のように一時的に受けとめながらも、喜びを感じなくなり、騎士になるのを断念します。

その他の4つの伝記は、前述のように夢の中での対話を伝えています。

(2) 様々な伝記の違い

伝記	声の問いかけ 1 と聖フランシスコの答え	声の問いかけ 2	聖フランシスコの答え	声の問いかけ 3	聖フランシスコの問いかけ	声の指示
はじまり	どこへ行こうとしているのか → 聖フランシスコの説明	主人としもべのうち、どちらがお前により良く行えるのか	主人	なぜ主人を捨ててしもべを、君主を捨てて臣下を選ぶのか	主よ、わたしが何を行うようお望みですか	故郷に帰り、主のお示しになることをするように。
2 チェラーノ	どこへ行こうとしているのか → 聖フランシスコの説明	主人としもべのうち、どちらがお前により良く行ってくれるのか	主人	なぜ主人ではなく、しもべを選ぶのか	主よ、わたしが何を行うようお望みですか	故郷に帰るように。幻視はわたしのわざによって霊的に実現する。
大伝記	なし	フランシスコ、どちらがお前にとってより良く行えるのか。主人かしもべか、金持ちか貧しい者か	主人・金持ち	なぜ主人を捨ててしもべを選び、豊かな神を捨てて貧しい者を選ぶのか	主よ、わたしが何を行うようお望みですか	お前の国に戻りなさい。お前の見た幻視は、成就すべき霊的使命を表しており、それは人間の考えによるものではなく、神が決めたこと。
三仲間	どこへ行こうとしているのか	主人としもべのうち、どちらがお前により良く行ってくれるのか	主人	なぜ主人を捨ててしもべを、君主を捨てて臣下を選ぶのか	主よ、わたしが何をしようお望みですか	故郷に帰るように。そこでなすべきことが告げられる。幻視は異なる形で理解されなければならない。

* はじまり：『会のはじまりまたは創立』（1241年）

* 2 チェラーノ：チェラーノのトマス『靈魂の憧れの記録』（1247年）

* 大伝記：聖ボナヴェントゥラ『聖フランシスコの伝記』（1263年）

* 三仲間：『三人の仲間たちによる伝記』（1276年以降または1244-1247年）

いくつかの共通点と相違点が目につきます。

- **聖フランシスコが自分の選択・決断についてより深く思いめぐらすようになったきっかけ**：4つの伝記のうち、聖ボナヴェントゥラ『聖フランシスコの伝記』を除くと、他の3つは、声の語りかけがきっかけです。「どこへ行こうとしているのか」という問いかけです。聖フランシスコは、「自分の計画」について話しますが、この問いかけは、地理的方角・目的地についての問いかけではなく、生き方についての問いかけであることが示されていきます。騎士になるためにプッリャでの戦いに向かうという外面的な計画を超えて、内面の方向性・計画に問いかけています¹。
- **どちらがより良く行えるのか（行うのか）という問いかけ**：4つの伝記における「声」の問いかけの中心部分はほぼ共通しています。「どちらがより良く行えるのか」という問いかけです（『靈魂の憧れの記録』のみ「できる」という動詞を用いていません）。
- **選択肢**：チェラーノのトマス『靈魂の憧れの記録』はより簡潔です。『会のはじまりまたは創立』と『三人の仲間たちによる伝記』には、「君主」「臣下」という選択肢も見られます。聖ボナヴェントゥラ『聖フランシスコの伝記』は、「君主」「臣下」という選択肢に代わり、「豊かな神」「貧しい者」という選択肢を記しています。特別な意図をもって編集しているのを感じさせます。
- **聖フランシスコが選ぶ生き方と選択肢との関係**：これらの選択肢のうちどちらを選ぶべきかは、世間の考えで捉えていた聖フランシスコには、分かりやすいものでした。しかし、聖フランシスコは実際には、「すべての人に仕えるしもべとなり、すべてを手放すかたとなられたキリストのこころ」に生かされることを目指すようになります。
- **聖フランシスコの問いかけ**：4つの伝記に共通しています。「主よ、（あなたは）わたしが何を行うようお望みですか」という問いかけです。
- **声による最終的な指示**：故郷に戻るようという指示は共通しています。また、その他の表現は若干異なりますが、本質的には神さまによる導きに従うよう求めている点で共通しているでしょう。聖フランシスコは、この声の招きを拒むこともできましたが、従います。

(3) 清貧（貧しさ）を強調する聖ボナヴェントゥラ

聖ボナヴェントゥラ『聖フランシスコの伝記』は、「君主」「臣下」という選択肢に代わり、「豊かな神」「貧しい者」という選択肢を記しています。特別な意図をもって編集しているのを感じさせます。なぜこのような表現を盛り込んだのでしょうか。

まず、この伝記において聖ボナヴェントゥラがどれだけ清貧に注目しているかを、見てみましょう²。

- 聖ボナヴェントゥラは、この伝記において、167回、貧しさ（清貧）に言及しています。他の重要なキーワードと比較しても非常に多いことが分かります（愛徳：30回、愛：90回、願望：52回、説教：58回、いつくしみ：19回、信心：104回、従順：46回、祈り・黙想・観想：80回、福音：85回）。
- この伝記における序文の冒頭において、清貧の重要性に触れています。洗礼者聖ヨハネがイエスさまの道を備える人であったように、聖フランシスコはいと高き清貧、イエスさまへの道を備える人として示されています³。
- 聖フランシスコの回心のはじまりであるハンセン病者との出会いは、イエスさまのようにすべてを

¹ Cf. BRUNETTE, Pierre, *Frate Francesco e le sue conversioni (François d'Assise et ses conversions)*, Les Editions Franciscaines, Paris 1993), CANALI, Paolo (traduzione di), pp.45-48.

² Cf. HAMMOND, Jay M., *Bonaventure's Legenda Major*, in *A Companion to Bonaventure*, HAMMOND, Jay M., HELLMANN, J. A. Wayne and GOFF, Jared (Edited by), Brill, Leiden and Boston 2014, pp.475-477.

³ 聖ボナヴェントゥラ『聖フランシスコの生涯』序文1参照。

手放して貧しく生きることと結びつけられています⁴。

- 聖フランシスコが完全な回心に至る中での衝撃的な出来事では、アッシジの司教と父親の前ですべてを手放し、清貧を愛しています⁵。
- 聖フランシスコが修道会の創立のように福音に従って生きる歩みを神さまから示される際には、回心と平和を告げ知らせよう促されていますが、それよりもまず清貧を生きるよう促されています⁶。
- 聖ボナヴェントゥラは、清貧が従順とへりくだる生活を促し、粗野で残忍なところといつくしみ深いところに変えるものとして捉えています⁷。
- 聖ボナヴェントゥラにとって、聖フランシスコは清貧を非常に大切にすることで、清貧は謙遜を養うもの、完徳の源です⁸。
- 清貧が聖フランシスコの修道会の基礎である、と述べています⁹。こうして、この会に入る人は皆、すべてを手放す者です¹⁰。
- 聖フランシスコが亡くなる際には、聖フランシスコが最期まで清貧に生きていることを強調しています¹¹。
- 聖フランシスコが亡くなった後には、聖フランシスコのことを、「清貧によって最も富む者」となった人と述べています¹²。

聖フランシスコのことを描くすべての伝記は、聖フランシスコが持ち物を手放し、非常に質素に生きたことを伝えています。聖ボナヴェントゥラによる伝記では、それが非常に強調されているように見えます。

この特徴は、時代背景を考慮する必要があるように思われます。聖ボナヴェントゥラは、1257年から1274年まで、より小さき兄弟会の総長を務めています。その間、教区聖職者の中には、聖フランシスコのより小さき兄弟会と聖ドミニコの修道会という二つの新しい会に対し、説教活動を行うことと司牧活動で報酬を受け取ること強く反対する人々がいました。このような中で、聖ボナヴェントゥラは、清貧を生きると同時に（司牧活動を含み）働きながら報酬を得るという会の活動が神さまの望みに反していないことを、聖書とりわけ福音、イエスさまとその弟子たちの生き方に基づいて反論しました¹³。

聖ボナヴェントゥラは、より小さき兄弟会の中では、貧しさを厳格に守ることを強調するグループではなく、共同体派に属しています。外的貧しさを内面的な霊における貧しさ（謙遜・素朴さ・精心の晴朗・霊的透明さ）と結びつけて捉えてもいます¹⁴。同時に、より小さき兄弟会の内外の課題を踏まえ、会則に沿って質素な生活を営み、兄弟たちにもそれを求めました。

聖ボナヴェントゥラの『聖フランシスコの生涯』において、声が「フランシスコ、どちらがお前にとっ

⁴ 同 I・1・6 参照。

⁵ 同 I・2・4 参照。

⁶ 同 I・3・1-2 参照。

⁷ 同 I・4・7 参照。

⁸ 同 I・7・1 参照。

⁹ 同 I・7・2 参照。

¹⁰ 同 I・7・3、3・3 参照。

¹¹ 同 I・14・4 参照。

¹² 同 I・15・1 参照。

¹³ Cf. 川下勝『フランシスカニズムの流れ』聖母文庫、pp.214-222、231-234; HUGHES, Kevin L., *Bonaventure's defense of mendicancy*, in *A Companion to Bonaventure*, pp.509-541; ACCROCCA, Felice, *Un santo di carta. Le fonti biografiche di san Francesco d'Assisi*, Edizioni Biblioteca Francescana, Milano 2013, pp.333-377; MARANESI, Pietro, *Bonaventura, Ministro generale, di fronte alla Chiesa e all'Ordine francescano*, in *Doctor seraphicus*, 2008, pp.17-65.

¹⁴ Cf. 長倉久子「ボナヴェントゥラの神秘思想におけるフランシスカニズム」、『中世思想研究』第 38 号、中世哲学会、1996 年、p.110。

てより良く行えるのか。主人かしもべか」と聞くだけでなく、「裕福な者が貧しい者か」と加えたことには、このような背景が強く影響しているでしょう。聖フランシスコは、「裕福な者」に仕えることを選びながらも、すべてを手放したイエスさまに従って「貧しい者」として生きるようになっていきます。

どのような伝記にも、著者の性格、体験、感情が何らかの形で反映されています。聖ボナヴェントゥラの『聖フランシスコの伝記』は、より小さき兄弟会の内外の問題に対応するために記されているので、様々な加筆、編集、変更がなされており、すべてを歴史的事実として読むことは注意が必要でしょう¹⁵。

とは言え、他の伝記と比較しながら、相違点、強調点を歴史的背景に照らして味わう中で、わたしたちの時代にとって、聖ボナヴェントゥラによる伝記と聖フランシスコを通して、神さまからどのようなメッセージがあるのかを思いめぐらすこともできます。

《こんにちのわたしたちに照らして》

- **計画立案と実行の基礎**：わたしたちは、問題を解決したり、より良い方向を目指したりするために、計画を立て、実行します。それは、一般社会でも教会でも行われています。悪いことではありません。しかし、4つの伝記が示す幻視の出来事は、聖フランシスコが自問自答し、選択・決断したことすべてで完結している、と伝えているわけではありません。自分で熟考、選択、決断することは悪くありませんが、この出来事は、神さまからの招きに応えながら、神さまと語り合い、交わり、選択、決断する姿勢を求めています。
- **神さまの望みを大切にするイエスさまと聖母マリアさま**：聖フランシスコの最終的な問いかけも、「主よ、(あなたは) わたしが何を行うようお望みですか」というものです。キリストが十字架上でのご自分の死を強く意識なさる中、ゲッセマネにて次のように祈られたことが、思い起こされます。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」(マルコ 14・36)。また、聖母マリアさまが、大きな不安を感じながらも、神さまに深くより頼んで、次のように仰せになったことも思い起こされます。「ご覧ください、わたしは主のはしためです。あなたのことばどおり、わたしに実現しますように」(ルカ 1・38)。わたしたちも、最終的には、神さまのあたたかな望みに沿った歩みを大切にしよう求められています。
- **神さまの望みに従う**：最終的な指示は、故郷に戻ることに従うことです。自分の力で人の上に立つことを目指す方向へ向かうのではなく、神さまのお望みになる方向へ向かうよう、招かれています。
- **世の中の視点と異なる道**：神さまのあたたかな望みに従うことは、世の中の視点からすれば、後退、失敗、挫折、諦めのように思えるかもしれません。しかし、後に分かることですが、聖フランシスコに語りかけた声は、神さま、またはあたたかくへりくだるイエスさまのところに生かされるよう招いています。それは、すぐにすべて示されたわけではなく、年月をかけて示されていきます。そして、生涯の様々な出来事の中で絶えず求められ、深められる歩みです。
- **選択・決断**：聖フランシスコには、声の呼びかけに従わないという選択・決断も可能でした。しかし、声に従いました。わたしたちは、どのような選択・決断を行うとしても、その根底・中心において、あたたかくへりくだるイエスさまのところに聖霊の助けによって大切にすることができたら。

¹⁵ Cf. DALARUN, Jacques, *La Malavventura di Francesco d'Assisi. Per un uso storico delle leggende francescane*, Edizioni Biblioteca Francescana, Milano 1996.

- 聖ボナヴェントゥラは、他の伝記とは異なる加筆をしています。わたしたちも、自分の性格、体験、感情を通して、聖フランシスコに対してイメージを抱いています。偏っている場合もあるかもしれません。聖霊の助けによって教会と世界（キリスト教と関わりのないような世界）と交わる中で、聖フランシスコを通して、神さま、イエスさまのころをより豊かに思いめぐらすことができれば。